

…神話で時間旅行…

## 火はどこからやってきた？

ねらい：①さまざまな地域に伝わる神話に触れ、その内容を通して、人類の価値観の多様性に触れる。

②神話に親しみ、現代の人間と自然との関係を問い直すことができる。

対象： 中学生以上

所要時間： 45分～

準備： 配布資料（次頁以降）

進め方：

- 1) 配布資料の3つの神話を読み、内容を理解する。
- 2) 火を人類が手にしたことで、人類にもたらされたものは何か。神話から読み取る。
- 3) 古代人にとって火はどのような存在だったのだろうか。暮らしや文化における火の役割について、現代社会と比較しながら考え、話し合いを行う。

発展：①以下のテーマで調べたり、話し合いを行う。

- 1) 世界には、他にどのような「火の起源の神話」があるだろうか。
  - 2) 神話で語られている起源には、「火」以外に、どのようなものがあるだろうか。
  - 3) 神話の神々やモチーフが用いられている小説、映画、ゲーム、漫画などは、身の回りにあるだろうか。
- ②3つの神話にでてくる神々から好きな神を選び、その神になりきり、現代人・現代文明と火などのテーマで話し合いを行ったり、ドラマのシナリオを書く。

火はどこからやってきた？

配布資料

## 火はどこからやってきた？

人間はどこから来たのか。太陽や月はなぜあるのか。人間は死後どうなるのか。神話を読むと、人類と生命の起源を、その当時の人々が探ろうとした思考の痕跡や原点に触れることができます。また、それらは後の人々によって伝播し、変形し、更にはさまざまな文学、アート、演劇、音楽、映画、ゲームなどのアイデアのもとにもなっています。

神話にはまた、古代の人々が自然とどのようにつきあおうとしてきたのか、その叡智が詰まっています。今、人類の未来について、エネルギーや水、地球環境の問題など、多くの危機が叫ばれています。ここでは、世界の＜火の神話＞を3つ紹介します。古代人からのメッセージを読み解き、未来人へ伝えるメッセージをみんなで考えてみましょう。

### 神話1 ギリシャ神話「プロメテウスと人間の運命」

ギリシャ神話は紀元前 15 世紀にまでその源流を遡ることができる。長らく口承で伝えられてきたものを、紀元前8世紀に詩人のヘシオドスが記述し、体系的に成立したといわれている。

#### この話に登場する主な神・・・

ゼウス・・・ギリシャ神話の主神。オリュンポス山の山頂に住まうと伝えられる 12 柱の神々の王。

プロメテウス・・・ゼウスの反対を押し切り、天海の火を盗んで人類に与える。

ゼウスが神と人間の持つことのできる取り分を、はっきり区別しようとしたとき、プロメテウスという知恵者の神が、その役を引き受けた。人間の味方だった彼は、一頭の牛を殺して、肉と内臓を皮にくるんで隠した上に、その全部を胃袋に入れて、屑の詰まった袋のように見えるものを一方に置いた。そして他方には、骨の山の上をすっかり白い脂肪で覆い隠してなにかさもおいしい肉と内臓があるように見えるようにして置いて、ゼウスにどちらかを、神々の取り分に定めるよう求めた。するとゼウスは、彼を騙してそちらを選ばせようとしたプロメテウスの悪巧みを見破っていたのに、骨の山の方を選択した。なぜなら牛の体のなかで、それだけが不朽である骨が、不朽で不滅の神々の取り分にふさわしく、たちまち腐って朽ちてしまう肉と内臓は、儚い生命しか生きられぬ人間の取り分にふ

火はどこからやってきた？

さわしかったからだ。

そのうえゼウスは、生命の糧になる食物が、大地を耕すつらい労働によってしか、人間の手に入らぬようにした。また火も人間から隠したが、その火をプロメテウスが、天から盗んで来て人間に与えた。するとその仕返しにゼウスは神々に命じ、みんなで協力して、最初の人間の女パンドラを造らせ、プロメテウスの兄弟のエピメテウスのもとに、花嫁として贈った。愚か者だった彼は、ゼウスからの贈り物を受け取ってはならぬと、プロメテウスに注意されていたのを忘れ、喜んで妻にした。彼女は夫の家で、大甕を見つけ、その嚴重な蓋を開けてみた。すると、そのなかには病気をはじめ、あらゆる災いが封じ込められていたので、それらが飛び出し、世界中に充満して、人間を苦しめ死なせるようになった。またパンドラから女たちが発生し、人間はその一人と結婚して、その腹から子孫を得なければならなくなった。

ゼウスに背いて、人間の利益を計ろうとした罰としてプロメテウスは、柱に鎖で身動きできぬよう縛られ、ゼウスが送る大鷲によって昼の間じゅう、肝臓を食われるという、生き地獄の責め苦に合わされた。不死の神の彼の肝臓は、鷲が<sup>ねぐら</sup>に帰ると、夜の間にまた元どおりに再生したので、この苦患には終わりがなかったが、長い年月の末にヘラクレスが、人間の英雄としての手柄の一つとしてこの鷲を矢で射殺し、プロメテウスを刑罰から解放して、神々の仲間に復帰させた。

プロメテウスの息子デウカリオンは、エピメテウスとパンドラの娘ピュラと結婚した。その時代にゼウスは、邪悪だった人類を滅ぼそうとして、大雨を降らせ地上に大洪水を起こした。だがデウカリオンとピュラは、正しい人だったので、プロメテウスから教えられて造った箱舟に乗って、溺死を免れた。洪水が引いたあとで彼らは、神託の教えに従って、石を拾っては肩越しに投げると、デウカリオンの投げた石は男に、ピュラの投げた石は女になった。

出典：吉田敦彦「ギリシア・ローマの神話」『世界神話事典』（大林太良、伊藤清司、吉田敦彦、松村一男 角川書店、2005、386 頁）

火はどこからやってきた？

## 神話 2 古事記「火の神カグツチ」

古事記は、8世紀初めに成立した日本最古の歴史書であり、古代の神話・伝説を多く伝えている。その由来は、天武天皇が稗田阿礼に命じて覚えさせ、元明天皇が太安万侶に書き留めさせたといわれる。

### この話に登場する主な神・・・

イザナギ・・・イザナミの兄であり夫。イザナミと共に国産み、神産みを行う。

イザナミ・・・イザナギの妹であり妻。イザナミと共に国産み、神産みを行う。

カグツチ・・・火の神

（イザナギと最初の結婚をして、国土の島と多くの神々を産んだ女神イザナミは、更に神を生み続ける。）

次に生んだ神の名は、トリノイワクスブネ、またの名はアメノトリフネという。次にオオゲツヒメを生んだ。次にヒノヤギハヤオを生んだ。またの名はヒノカガビコといい、またの名はヒノカグツチという。この子を生んだことによって、イザナミは女陰にやけどを負い、病に臥せった。イザナミの吐いたものから生まれた神の名は、カナヤマヒコとカナヤマヒメである。大便から生まれた神の名は、ハニヤスヒコとハニヤスヒメである。小便から生まれた神の名は、ミツハノメとワクムスヒである。この神の子は、トヨウケヒメという。そして、イザナミは、火の神カグツチを生んだことが原因で、とうとう亡くなってしまった。

イザナギ、イザナミのふたりの神が、共に生んだ島は十四、神は三十五神である。

そこでイザナギが言った。

「いとしい我が妻を、ひとりの子と引き換えにしてしまった」。そうしてイザナミの頭のそばで腹這い、また足下に腹這いして泣いたとき、その涙から生まれた神は、天香具山の畝尾（地名）の木の本（地名）に座っていてナキサワメの神と名付けられた。亡くなったイザナミは出雲の国と伯耆の国の境にある比婆の山に葬った。

イザナギは腰に帯びていた十つかみある長い剣を抜いて、その子カグツチの首を斬った。その刀の切っ先についた血は、たくさんの岩石の群れに飛び散って、そこから生まれた神の名をイワサク、ネサク、イワツツヲという。刀の根元についた血もまた、多くの岩石に飛び散って、そこから生まれた神の名はミカハヤヒ、ヒハヤヒ、タケミカヅチオ、またの名をタケフツ、トヨフツという。刀の柄についた血は、指の間より漏れ出て、そこから生

火はどこからやってきた？

まれた神の名はクラオカミ、クラミツハである。イワサクの神以下、クラミツハまでの八神は、刀によって生まれた神である。

（現代語訳は、倉野憲司校註『古事記』（岩波書店、1963）の訓下し文をもとに作成。）

神々の名前について

トリノイワクスブネ／アメノトリフネ＝鳥のように天空や海上を通う楠製の丈夫な船。

オオゲツヒメ＝食物を掌る女神。

ヒノヤギハヤオ＝物を焼く火力による名。

ヒノカガビコ＝輝く火光による名。

ヒノカグツチ＝物の焼けるにおいによる名。

カナヤマヒコ＝鉾山の神（男）

カナヤマヒメ＝鉾山の神（女）

ハニヤスヒコ＝粘土の神（男）

ハニヤスヒメ＝粘土の神（女）

ミツハノメ＝灌漑用の水の神。

ワクムスヒ＝若々しい生産の神。

トヨウケヒメ＝食物を掌る女神。

イワサク＝岩石を裂くほどの威力ある神。

ネサク＝根を裂くほどの威力ある神か。

イワツツヲ＝岩石の神か。

ミカハヤヒ＝火の根源である太陽をたたえた神名。

ヒハヤヒ＝同上。

タケミカツチオ＝勇猛な雷の男神で、剣の威力をたたえたもの。

タケフツ→タケミカツチオ

トヨフツ→タケミカツチオ

クラオカミ＝溪谷の水を掌る神。

クラミツハ＝同上。

（参考：倉野憲司校註『古事記』（岩波書店、1963）吉田敦彦「火の起源」『世界神話事典』大林太良、伊藤清司、吉田敦彦、松村一男（角川書店、2005））

火はどこからやってきた？

### 神話3 ハイダ族の神話「火を盗む鳥」

(ハイダ族は北アメリカ北西海岸沖クイーン＝シャーロット諸島に住む先住民族)

セトリン＝キ＝ジャシュ・・・ワタリガラスに火を盗まれる。

大昔、大洪水がありすべての生物が減んだとき、生き残って現在の生物の祖先となったのがワタリガラスであり、火を盗んできたのもこの知恵者の鳥がしたことになっている。自分の子孫の人間達に、現在ナース河の流れている土地に住んでいたセトリン＝キ＝ジャシュという神のもとにあった火を盗んで与えたいと思ったワタリガラスは、松葉に変身してこの神の家の近くの水の流れに浮かんでいた。

そこにやがて神の娘が水汲みに来て、持ってきた容器のなかに水と一緒に松葉も汲み入れ、そのことに気がつかずに水を飲んで、松葉も飲み込んでしまった。すると彼女はたちまち妊娠して男の子を産んだが、その子は松葉になって彼女の胎内に入り込んだワタリガラスだった。

こうしてまんまと家族の一員として神の住居の小屋に住むことに成功したワタリガラスは、ある日、みなが油断しているすきに火種を盗み、もとの鳥の姿に戻って屋根の煙出し穴から飛び出し、地上のあちこちに火を広めながら飛び回った。このとき彼が最初に火を置いた場所の一つが、ヴァンクーヴァー島の北東の端であったので、それで今でもそこに生えている木に黒い色のものが多いのだという。

出典：吉田敦彦「火の起源」『世界神話事典』（大林太良、伊藤清司、吉田敦彦、松村一男 角川書店、2005）